

漠然としたものから具体的なイメージへ

大学・理工学部・4年

期間：令和7年9月8日～12日（5日間）

この度の就業体験は、私にとって非常に貴重な機会となりました。インターンシップに参加する前は、大学の講義や独学でプログラミングや技術的な知識を学んでいましたが、それが実社会でどのように活かされるのか、仕事としてどのような意味を持つのか、漠然としたイメージしかありませんでした。しかし、この5日間の体験を通して、その漠然としたイメージが明確なものに変わり、仕事に対する大きな期待とモチベーションを得ることができました。

体験を通して最も強く感じたのは、これまで学んできた知識や技術が、現場で生きたツールとして機能しているということです。これまで座学で学んでいた理論やスキルが、現実の業務において課題解決の一助となることを実感できたことは、今後の学習に対する大きなモチベーションとなりました。特に、これまで画面の中でのみ完結していたコードが、実際のサービスやシステムとして動く様子を目の当たりにしたことは、深く印象に残っています。自分の学習が実社会と繋がっていることを改めて認識できたことは、今後の学習への意欲をさらに高める出来事として、深く心に刻まれました。

また、技術的な学びと同じくらい重要だと感じたのは「会話の重要性」です。単に言葉を交わすだけでなく、相手の立場や状況に応じて、話題や表現を使い分けることの重要性も学びました。お客様やチームメンバーの視点、そして管理者の視点など、さまざまな角度から物事を考えることで、より円滑に業務を進めることができると気づきました。表面的な言葉だけでなく、相手が本当に伝えたいことや、その背景にある意図を想像することで、認識の違いが生まれず、ミスのない業務につながると学びました。社員の方々が活発に意見を交わし、協力しながら仕事に取り組む姿は、私にとって非常に良い刺激となり、チームで働くことの面白さや難しさを学ぶ貴重な機会となりました。

体験前は、社会に出て働くということが漠然としたイメージしかなく、将来に対して漠然とした不安を抱えていました。しかし、今回のインターンシップを通して、実際に自分が働く姿を具体的にイメージできるようになりました。社員の皆様の働く姿や職場の雰囲気を直接感じることで、仕事に対する漠然とした不安が、具体的な目標を持った期待へと変わりました。特に、プロフェッショナルとして課題を乗り越えていく社員の方々の姿は、将来のロールモデルとなり、自身の成長へのモチベーションを一層高めてくれました。

今回の就業体験で得られた学びは、私の今後の人生にとっての大切な経験でした。特に、現場での実践を通して、学習が単なる知識の蓄積ではなく、課題を解決するためのツールであることを深く理解しました。今後は、今回の経験で学んだコミュニケーションの重要性を胸に刻み、積極的に人と関わりながら、社会人として成長していきたいと考えています。また、エンジニアとして、より高い技術力を身につけるため、日々の学習にも力を入れていきたいと思っています。この貴重な経験を今後の学生生活に活かし、学んだことを実践しながら、将来の目標に向かって努めていきたいと思っています。

コミュニケーションで紡ぐラジオ局

大学・国際文化学部・2年

期間：令和7年9月8日～12日（5日間）

私は、山口県全域で番組を放送し、地域イベントや地域活性化にも積極的に取り組まれている会社で、5日間の就業体験をさせていただいた。これまで、将来はラジオ局で働きたいと考えていたが、具体的にどこでどのような職種や働き方を目指すのかまでは明確にできていなかった。今回の体験を通じて、番組収録の見学や営業外回りの同行、ラジオCM制作実習、話し方のレクチャーなど、多様な業務を実際に知ることができた。また、局のアナウンサーやフリーで働くパーソナリティ、総務部・編成制作部・営業部といった幅広い職種の方々から直接お話を伺うことで、ローカルラジオ局の実態を理解し、自分自身が働く姿を以前より具体的に思い描けるようになった。さらに、正社員かフリーか、制作か営業かといった多様な働き方が存在することも知り、大きな気づきとなった。

特に印象深かったのは、ラジオCM制作実習である。20秒という限られた時間に必要な情報を収め、印象的なフレーズを考え、適した音楽を選ぶ作業は想像以上に困難であった。その際、社員の方から「何かを作る際には、対象を明確にすることが大切である」と直接教えていただいた。この言葉は、制作の本質を示すだけでなく、今後の学びや実践における指針となるものであると強く感じた。そのため、大学で運営しているポッドキャスト放送の制作や今後の学内での作品制作に生かしていきたい。

また、ラジオ番組やCM、イベントの制作には、あらかじめ決まった形や唯一の正解がなく、常に工夫と挑戦が求められることも学んだ。その上、少人数で幅広い業務を担う環境だからこそ、社員一人ひとりがラジオ番組や企画に注ぐ熱意や愛情が強く伝わり、その熱量が番組や企画、会社までもを支えていることを実感した。

今回の就業体験を通じて、ラジオ局は単に「多数のリスナーに向けて発信する場」ではなく、社内や取引先、そしてリスナーとの「一対一のつながりの積み重ね」によって成り立っていることを知った。部署を超えて的確にコミュニケーションを取り合うことで、初めて一つの企画や番組が完成する。こうした実態を知ることで、私のローカルラジオ局に対するイメージは大きく変わった。これまでは、都会のラジオ局でなければやりたいことができないのではないかと考えていたが、(実習先)のこれまでの取り組みや社内の雰囲気を感じ、地域に根ざした局であっても自分の強みを生かした番組・企画制作が十分に可能であると確信した。

(実習先)は、少人数体制であるからこそ互いを支え合い、長い歴史の中で地域からの信頼を培ってきた企業である。今回の体験を経て、(実習先)で働くことを目標の一つとし、就職活動に取り組んでいきたい。そのために、今後も大学生活の中で表現力や企画力を磨き、これからのラジオ番組制作を担える人材となれるよう、自分の「好き」を追求しながら視野を広げていく。

番組作りの大変さ

大学・人文学部・3年

期間：令和7年9月1日～3日（3日間）

今回のインターンを通して、番組作りの大変さと奥深さを学びました。私はテレビ局でアルバイトをしているため、ある程度は業務を理解しているつもりでした。しかし、各部署の説明を聞くうちに、自分が知っていたのはほんの一部にすぎないことに気づかされました。

まずアナウンス部では、ニュースを読むだけでなく、自ら取材に出向いてレポートしたり、イベントに参加して地域の人々と交流したりと、幅広い業務があることを学びました。発声や言葉遣いに加え、臨機応変な対応力や高いコミュニケーション能力が求められることを知り、今の自分にはまだ足りない部分が多いと痛感し、大きな刺激となりました。技術局では各フロアを案内していただき、会社の体制を理解するとともに、普段触れることのない機材やシステムを学ぶことができました。特に、中継車の内部に入らせていただいた経験はとても貴重でした。

報道部では、取材同行や原稿作成、編集の様子を学びました。記者の方が取材、執筆、編集、テロップ発注まで一手に担っていることに驚きました。インターン生同士で原稿を作成する際には、分かりやすくまとめることに苦戦し、完成までに2時間近くかかりましたが、それを記者の方が数十分で仕上げている姿にプロの技を実感しました。

また、取材現場ではカメラを体験させていただき、ただ撮るのではなく「どう見せるか」を考え抜いて映像を構成しているところを学びました。メディアビジネス局では、ホームページ作成やSNS運営を通じて、若者のテレビ離れに対応しようと工夫している姿を知りました。

さらに、スポンサーとの打ち合わせやCM編成、イベントの企画・運営など、少人数で幅広い業務を担っていることを理解し、まさに縁の下の力持ちだと感じました。ラジオ局ではスタジオ見学や生放送を拝見しました。映像がない分、音だけで情報を伝えるラジオの魅力を強く感じました。

最後に若手社員の方との面談では、年齢が近いこともありフランクにお話しできました。就職活動やテレビ局に入るまでの努力について伺い、とても勉強になりました。今後の就職活動に生かしていきたいと思います。

今回のインターンを経て、テレビの見方が大きく変わりました。「このニュース1本を作るのにどれほどの時間がかかったのか」「このCMの裏にはどれほどの人が関わっているのか」などと、番組の表側だけでなく、その裏側にも意識を向けられるようになりました。アナウンサーになることが私の目標ですが、まだまだ力不足だと感じています。これからも自己分析を重ね、一歩ずつ努力していきます。三日間にわたり貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

IT 業界の姿と、私の設計観

大学・工学部・3年

期間：令和7年8月25日～29日（5日間）

このインターンシップを通して、私は IT 企業についての認識が大きく変わったように感じております。私は以前、IT 企業に対する印象としてパソコン業務というイメージを強く持っておりました。その認識は間違っていないかもしれませんが、IT 企業の本質はただパソコンと向き合うだけではないことを、このインターンシップを通じて知ることができました。

今回のインターンシップでは、まず1日目にフローチャートの練習をし、2・3日目にシステムのテストや確認についての実習を行いました。実習としてはプログラムを見つめる時間が長かった印象がありましたが、初日にフローチャートの基礎を学んだおかげで、2・3日目に行った実習の重要性を理解することができました。テスト業務というのは、社員の方のお話によると、就職して最初に就く業務だということです。私は、最初から自分で何かを作ることは少ないだろうと考えておりましたが、実際にテスト業務を体験したことでその重要性を実感いたしました。なぜなら、どこがエラーを起している原因なのかを見つける地道な作業であったからです。システムの試運転業務も同様で、顧客のニーズに沿っているのか、要件を満たしているのかを確認するため、実際の業務ではかなり気を配る必要があるのだと考えました。

4・5日目では、実際にシステムを作るための実習を行いました。4日目の画面レイアウト作成では、実際の画面を Excel で作成するというものでしたが、ゼロから画面を設計することを考えると、顧客の求める機能をどのように配置するのかを検討することの難しさを感じました。5日目の GIS という技術を利用した実習では、実際のデータと地図を組み合わせることでマップ上にデータを反映させており、社会的に利用されている様々な地図系のアプリケーションがどのように作られているのかを知ることができました。この実習でも、必要なデータを収集する際には誤りがないようにすることが求められました。

今回のインターンシップを通じて、システム設計の背後には必ず顧客の存在があることを強く感じました。当然のことではありますが、私の IT に対するイメージはパソコンと向き合う姿が中心であったため、顧客とのコミュニケーションが非常に重要であることを知り、私が学んでいる機械設計等とも通じる部分が多いことに驚きました。システム設計において顧客のニーズを考えることはもちろんのことですが、実習中にはオフィスの席を空けて顧客の元へ出向いている方や、電話で細かい確認を行っている姿も何度も拝見し、IT 業務における顧客との関わり方を具体的に知ることができました。

先述したとおり、これは機械設計にも通じています。顧客とのコミュニケーションをとるということは、実際の設計において最も重要な要素の一つであると感じております。IT 業界の業務の姿を拝見し、自分の目指す設計業務に対するイメージをより深めることができました。この経験を、今後の勉学や就職活動に活かしていきたいと考えております。

現場で学んだ制作の楽しさと責任

大学・経済学部・3年

期間：令和7年9月17日～19日（3日間）

私は、大学とケーブルテレビのコラボ企画のリポーターをしているだけでなく、撮影・配信に同行するアルバイトなどで、マイク・配線に触れる機会や、実際にケーブルテレビの番組を視聴する回数が増えたことで放送業界に興味を持つようになりました。前回春休みのインターンシップでも放送業界での体験をさせていただき、番組制作や現場の雰囲気に触れることで、より詳しく放送業界について知りたいと思い、今回のインターンシップでは、さらに実践的な業務を体験し、ケーブルテレビの具体的な業務内容を理解したいと思い参加しました。

今回のインターンシップで最も印象に残っていることは、初めてカメラに触れることができ、取材同行や編集体験を通じて、一連の流れを実際に経験することができたことです。インターンシップでは主に、取材同行や編集体験、原稿作成、収録見学などを行いました。ここからは、各日程で行った業務について報告していこうと思います。

まず、1日目に会社概要の説明をしていただきました。そこで、地上波放送とケーブルテレビの違いやケーブルテレビならではの強みを知ることができました。また、収録見学ではリポーターの方々の声量や視聴者に伝わりやすいような大きな反応だけでなく、演者の方が撮影から編集まで全ての業務を行っていることに驚きを感じました。その後、この日が初めてカメラに触れる機会となり、機材操作の難しさと楽しさを実感しました。

2日目には、実際の取材に同行し、撮影体験やインタビューを行いました。取材現場での臨機応変な対応や、カメラワーク、カメラの導線などの重要性を肌で感じるすることができました。加えて、撮影の技術だけでなく、インタビューの許可を取ることや実際にインタビュー者と会話することで、人に触れる仕事であることを実感することができました。また、編集体験を通じて、尺の中に収めることの難しさと、どのようにしたら視聴者に伝わりやすく映像の繋がりやまとまりのある編集になるのかということの難しさも知ることができました。

3日目の最終日には、ニュース番組の取材に同行し、今回のインターンシップでは始めて原稿作成を行いました。前回のインターンシップで同じ業界を体験しているからこそ、会社によって原稿の書き方や伝えたいポイントなどの違いを感じるすることができました。加えて、原稿を書く際には資料だけでなく、撮影現場でどれだけの情報量を持ち帰れるかも必要になることを感じました。

今回インターンシップに参加したことで、放送業界で働く上で必要な知識や技術を実践的に学ぶことができただけでなく、取材から撮影、原稿作成、編集までの一連の流れを実際に体験することで、業務のつながりや現場での判断力の重要性を理解することができました。初めてカメラに触ることができ、自分で撮影した映像を編集して完成させる過程を経験したことで、制作の楽しさと同時に責任の重さも感じました。3日間という短い期間ではありましたが、充実した体験の連続で、放送業界への理解が深まり、興味もさらに強くなりました。3日間での学びを今後の大学生生活や就職活動に役立てていきたいと思っています。3日間本当にありがとうございました。

「報・連・相」と「信用と信頼」の重要性を学んだ2週間

大学・福祉情報学部・3年

期間：令和7年8月18日～29日（10日間）

就職先としてIT業界を視野に入れており、部門研修を通じて業界理解を深められることや、開発研修の機会がある点に興味を惹かれたため、インターンシップに参加した。2週間の就業体験を通して、私は「信用と信頼」と「報・連・相」の重要性を強く学ぶことができた。

第1週目の初日は、(実習先)が行っている事業についてのオリエンテーションを受け、さらに個人情報を含む情報を取り扱う際の注意点についてご説明いただいた。特に印象に残っているのは、ハードディスクやSSDを物理的に破壊する作業を実際に体験したことである。その衝撃的な体験を通じて、顧客の情報を守ることが企業の「信用と信頼」を支えているのだと実感した。加えて、ISMSやPMSを取得し、徹底した管理体制を整えていることも学んだ。企業にとって信用は目に見えない資産であり、一度失うと取り戻すことは難しいため、日常的な業務の積み重ねが何より大切であるという言葉が強く心に残った。

2日目にはWindows PEの作成を体験し、導入業務に携わる方との座談会を通して、導入の仕事の流れや意義を理解することができた。3・4日目には各部署の方々から事業内容や役割について説明を受けた。営業部の方からは顧客の課題を理解し、最適な提案を行うことの重要性を学び、技術職とは異なる視点を得ることができた。5日目には1週間のまとめとしてプレゼンテーションを行い、説明とプレゼンの違い、聞き手を意識した伝え方について学ぶ機会を得た。これらの経験を通じて、第1週目は「信用と信頼」を支える企業活動の在り方を理解することができた。

第2週目は開発研修に参加した。特に2日目には予期せぬエラーが発生し、開発を担当する部署全体が原因究明に取り組む様子を間近で見学した。分からないことが出てくるとAIや同僚に相談し、部署内でこまめに連絡を取り合いながら問題解決にあたる姿が印象的であった。結果として1日かけてもエラーを解決することはできなかったが、翌日には代替手段を準備し、作業を続行できる体制を整えていた。その姿から、開発業務ではトラブルが避けられないものである一方で、迅速かつ的確な「報・連・相」を徹底することで被害を最小限に抑え、チーム全体で前に進むことができることを学んだ。細かなことでも共有を怠らず、相談や連絡を積極的に行う環境こそが、大きな事故やトラブルを未然に防ぐことにつながるのだと実感した。

このインターンシップを通じて、私は第1週目に「信用と信頼」の重要性を、第2週目に「報・連・相」の大切さを学んだ。信用は企業の根幹を支えるものであり、失えば容易に取り戻せない。だからこそ、情報管理を徹底し、日々の行動で信頼を積み重ねていくことが重要である。また、どんなに優れた技術や仕組みがあっても、チーム内での報告・連絡・相談が欠ければ大きな問題を引き起こしかねない。今回の経験を通じて、IT業界に限らず社会人として働く上での基盤となる姿勢を学ぶことができた。今後は大学生活や就職活動においても、この学びを意識して行動し、将来的には顧客や仲間から信用・信頼される社会人を目指していきたい。